

# 留学生の現代日本事情理解のツールとしての映像と

## 「映像読解教育」の試み

中河和子・深澤のぞみ・濱田美和

### 要 旨

「現代日本事情」の授業実践として、「メディアが映し出す現代日本社会—人類共通の地球問題を考える—」を統一テーマに授業を行った。この授業の大きな目的は、現代日本事情を知識として注入することではなく「自・他文化を読み解く力の萌芽を目指す」ことである。授業で取り扱ったメディアの中でも、特に同時代的に進行しているTVドラマ、映画、アニメ等の映像メディアが、学生が主体的に日本文化・母文化を捉え直すきっかけや動機づけに、大きな役割を果たし得るという感触を得た。さらに他のメディア（印刷メディア、音声メディアなど）に比べこれら映像メディアは、留学生が日常で触れる機会が多いにもかかわらず、読み解くスキルが解明されておらず、学生に対する体系的な訓練もされていないという問題を感じた。筆者らはこれを「映像読解力」と考え、授業実践の中でその養成を試みた。

【キーワード】 現代日本事情、映像メディア、映像読解

### 1 はじめに

教室で留学生と接していて、留学生が日本の社会・文化や日本人に対して、強いステレオタイプを持ち続けていることに驚いた経験がある。留学生は、日本に住み、日本の大学で学び、時にはアルバイトもしているのだから、周りには自分なりの見方をするためのリソースが数多くあるはずである。しかし、留学生は、日本の社会・文化を理解するためにどのようなリソースが存在し、どのように使えるのかについて、実はよく知らないのではないかと思われた。特に、一番身近にあって触れる機会も多いテレビ番組や映画などの映像メディアは、様々な意味で、現代の日本の状況や価値観が照射されていると考えられるが、多すぎる情報量等のために読み解けず、かえってステレオタイプが強化されることもあるように思える。筆者らは、これらの映像メディアを留学生が有意義に利用できるようになるためには、映像メディアの読み解き方、つまり「映像読解」とでも呼べるような能力の養成が必要ではないかと考えた。

本稿の「現代日本事情」の授業実践の目的は、「現代日本文化」を読み解くための活動を行うことと、そのためのツールとしての映像メディアを使いこなせるように、「映像読解」のスキルを養成することである。この現代日本を読み解こうとする作業は、取りも直さず自国の文化を読み解くことにもつながる。さらにそれは、国境・民族というものを超えた、人類共通の課題となっている種々の地球問題を考えることにも通じるはずである。

本稿は、このようなコンセプトのもと、映像メディアを日本事情理解のツールと捉え、実際の授業で活用した報告である。まず、背景となる現代日本事情とメディア利用教育及びメディア・リテラシーの関係について整理し、これまでに日本語教育の中で行われてきた映像を使った授業について概観する。その上で、筆者らが実践した授業の様子について報告する。

## 2 現代日本事情とメディア利用教育及びメディア・リテラシー

### 2.1 現代日本事情

留学生に対する日本語教育に関する科目は、言語運用力を育成することを主眼とした「日本語」という科目と、日本に対する文化的知識を補強し、それを以って留学生の学力を日本人学生並にすることが主眼とされる「日本事情」という科目に、現実的には大別され得る。「日本事情」科目は、戦前より日本語教員が受け持ってきた歴史があるが、この科目の扱う領域をどのように捉えるかということは、近年特に多くの論考がある（長谷川1999, 川上1999, 他）。しかし大学や高等専門学校などでは、現在も少なからぬ教育現場で以下の文部省令21号に記されているような捉え方がなされていると思われる。

文部省は、1962年「日本語教育等」を単位認定科目とし、日本語教育等の教育内容を「一般日本事情、日本の歴史、文化、政治、経済、日本の自然、日本の科学技術といったもの」として、「日本事情」を日本語教育の一部に位置づけた上で「各授業科目の内容については、日本人学生に対する一般教養科目の趣旨と同様の教育的意図を実現できるように留意するとともに、（中略）専攻分野に応じた基礎知識を持ち合わせて学習し得るように配慮…」とした。この教育内容は、ある社会の成員が一般的に持っていると思われる教養的知識、社会的所産<sup>(1)</sup>と言えるもので、具体的にはジェンダー、環境問題、教育問題などという切り口で教授細目に並べられよう。

筆者らは「現代日本事情」の教育活動の対象である上記の社会的知識・所産を、「固定的な在るもの」としては捉えていない。またその「社会的知識・所産＝文化」の境界線が国家（日本）や、民族などという従来の概念で簡単に引かれるものとも考えていない。さらに留学生が「現代日本事情」を学ぶことは、社会的知識・所産を知識注入されることではなく、最終的には自・他の文化を読み解く能力を養成することだと考えている。そしてそれは「学習者と学習者、学習者と授業者で日本文化のイメージを共に探求し、共に練り上げていく」（川上1999）作業にもつながる。本稿の実践は、その萌芽を目指している。

「文化」を「ある社会的知識・所産」とのみ捉えず、「他者との相互作用に介在する文化」（＝他者とインターアクションすることを前提とした場合の、自己と他者との間に横たわる価値観や認識、行動様式の差などを指す。これは教室場面に切り取られて持って来られるべきものではなく、文化的背景の異なる人との直接的接触により、学習者が自ら気づくというプロセスが重要である。）や、さらに「個としての文化」という捉え方の重要性が、近年日本語教育で多く言われている（佐々木倫子2002, 他）。筆者らはこれも否定するものではない。上記の文化概念を「日本事情」教育で取り上げる重要性を充分認めたと、現時点で段階的に「現代日本事情」の対象を「（日本の）社会的知識・所産」と位置づけたのは、以下の理由からである。

「現代日本事情」を実際に授業として運営する場合、そこには時間的制約とともに当然、学習者個々の（母文化の影響を受けた）学習ビリーフが存在する。知識注入を学習の中心に据えている学習者も充分存在し得る。また主体的な学習をするためにも、ある段階の学習者には「基礎的体力となる知識」の提供は必要である。「現代日本事情」で提供された知識が、後日学習者の中で発展変容することを期待した上での段階的処置である。

最後に、本稿で筆者らが自分たちの教育内容を「日本事情」ではなく、「現代日本事情」と捉えたことについて述べる。一般に「日本事情」教育で取り扱っている「ある社会的知識・所産」は、ある社会の構成員が一般的に持っていると思われる教養的知識、社会的所産<sup>(1)</sup>であり、そこで取り扱われるのは、歴史、政治・経済、日本人の日常習慣、伝統文化など幅広いものである。

本実践の教育内容は、統一テーマ「メディアが映し出す現代日本社会－人類共通の地球問題を考える－」にあるように、現代日本社会という枠組の中で、社会問題とされていることをグローバルな視点で考え

てみるというものである。ここでは「現代」に焦点が当てられている。この背景には4.1「授業の概要」で述べるように、本学の留学生教育の中で、現代日本の文化は日本語能力の養成の方が重視され、「伝統文化・行事」「一般の日常社会習慣」に比してあまり取り上げられてこなかったという状況や、学生の今日のニーズがある。よって本実践で取り扱う教育内容を「現代日本事情」とした。

## 2.2 メディア利用教育とメディア・リテラシー

「現代日本事情」にとってメディア情報は、(その取り扱いの方法論と理論枠組がさらに論じられるべきであるが) 題材として不可欠といえるだろう。メディアがその社会の今日的状況や価値観を照射しているのか、構築しているのかどちらにしても、メディアがその社会と非常に密接な関係にあることは疑いがない。本稿の実践では、メディア情報の中でも映像メディア(TVドラマ番組、映画など)を扱うことにした。理由は、学習者が日常生活でもっとも触れる機会が多いにもかかわらず、それを読み解くスキルが充分解明されず、したがって日本語教育現場でも体系的な訓練がなされていないと判断したからである。<sup>(2)</sup> また今回ストーリー性のあるTVドラマや映画を多く用いたことについては、メディアに限らずどの情報も究極的にはその社会の実相を表わし得ないのであれば、フィクションと位置づけられたドラマの方が、どのようなメディア観を持った学習者も、比較的健全な批判力を働かせやすく、「クラス全体で日本文化のイメージを共に探求し、共に練り上げていく」作業に結びつきやすいと考えたからである。

メディア教育に関しては、メディア・リテラシーの教育の必要性が近年日本語教育の分野だけではなく広く主張されている。厳密な意味でのメディア・リテラシー教育と、本実践でのメディア利用教育は分けて考えられるべきだろう(門倉2002)。前者はメディアが形作る現実を建設的な批判力を持って読み解き、さらにメディアを使った表現力を養う教育で、すなわちここではメディアのあり方自体が問題にされる。後者はメディアを、現代日本事情を読み解くツールとして利用するものである。

しかしメディアが提供するものが、程度の差こそあれ、時の政局や視聴者・読者、番組スポンサーなどに少なからぬ影響を受けた商業的・思想的・政治的判断の産物であるということは、否めない事実である。筆者らは、本実践で映像メディアを利用するに当たっても、時間の許す限り次のことに留意し学習者の問題意識の喚起に努めた。

- その映像メディア(TV番組など)の制作当時の社会現象、社会問題の提出。その映像メディアの当時の反響、視聴率、時評などの紹介。

自文化・他文化ともに読み解く力を育成することを最終的に目指す「現代日本事情」教育であれば、メディア利用教育にも、メディア・リテラシーの視点はできる限り盛り込まれるべきだと考える。

## 3 日本語・日本事情教育における映像メディアの使用

映像メディアの使用には、教室の一斉授業での使用と個人学習での使用が考えられ、また、映像は、その種類により、(1)日本語・日本事情教育用に作られた映像教材、(2)日本のテレビ番組、CM、映画などの一般映像、そして、(3)教師や学習者がビデオカメラを使って撮影した映像の三つに大別される。(国立国語研究所1995)従来の日本語・日本事情教育においては、新聞、雑誌などのメディアと比較すると、日本のテレビ番組、CM、映画などの一般映像を使用した授業の実践報告は極めて少なく、中でも日本事情教育における使用例は、筆者らの知る限り、小西・島2002と門倉2002bの2例のみであった。また、テレビ番組には、報道番組、解説番組、ドラマ、アニメ、CMなど多種多様な番組があるが、扱われているのはごく一部でしかも報道番組、CMなど短時間の番組への偏りが見られる。日本語・日本事情教育における映像メディアの活用方法は、未だ十分な研究がなされておらず、今後開拓が必要な分野であると言ってよいであろう。本節では、日本のテレビ番組を教室の一斉授業で使用した先行の実践

報告を紹介しながら、筆者らの実践との共通点、相違点について見ていきたい。

テレビの報道番組を用いた授業の実践報告として、遠藤1988と市川1991がある。いずれも聴解の授業での利用である。遠藤1988は「ニューススコープ」(TBS)中の特集を素材にして、次のような方法で授業を行っている。まずウォーミング・アップとしてキーワードの提示と語彙リストによる語の説明を行った上で、ビデオを1回見て、ビデオの内容の要点を質問しながら確認し、全体を把握させた後、さらに内容を細かく見ていくという方法である。市川1991は、ニュースの提供する中心的な意味を理解するための聴解能力を身につけさせることを目的とし、「筑紫哲也ニュース23」(TBS)、「ニュース・ステーション」(テレビ朝日)、「ワールド・ビジネス・サテライト」(テレビ東京)、「関口宏サンデー・モーニング」(TBS)を用いている。授業の進め方は、教材の話題の背景知識を説明し、ニュースの焦点となっている部分についてのタスクを口頭で与えた上でビデオを見せ、タスクに口頭で回答させ、その後音声テープにより学習者が各自のペースで聴解練習を行い、最後にディスカッションを行うという方法である。<sup>(3)</sup>ディスカッションの段階では、「教材化した番組の内容によっては、話題自体ばかりでなく、報道のされ方、解説者の分析の仕方や意見、論理の展開などにまで話が及ぶこともある」(市川1991 p.130)とあるように、メディア・リテラシーにも触れ、報道番組ビデオ使用の効果の一つとして、「日本事情の知識獲得」も提示されている。<sup>(4)</sup>

テレビの解説番組を用いた授業の実践報告としては、山田1990と三門1994がある。山田1990はハイテク番組『NHK経済マガジン』の「ハローテクノ」、『NC845』の「845情報」、『サイエンスマガジン』の実験場面(3番組ともNHK)を、中国からの技術研修生を対象とした授業で用いている。いずれも放送時間が数分というもので、授業の目的は、推測能力をつけさせ聞き取り能力を高めることにある。授業の方法は、単語リストを配布し、ビデオを見せたあとに音声テープによる聞き取り練習をする。他に、番組の展開の仕方をパターン化した「ビューイングガイド」をビデオの視聴前に配布することにより、学習者の理解を深めるのに役立てている。三門1994は時事解説番組「視点・論点」(NHK)を、経済、経営学部の留学生を対象とした専門日本語教育の授業で用いている。番組中の専門用語説明の際の日本語の理解や修得を主たる目的とし、まずビデオの内容に即した話題を提示しながら、キーワードの説明、学習者の予備知識の確認を行ったあと、ビデオを視聴する。ノートテイキングの練習、ビデオの内容の一部を学習者に彼らの日本語でもう一度表現させる練習、専門用語を既習の日本語で説明する練習、番組中に使われた図表を利用しての図表の説明練習、談話全体の要約練習を行うという授業内容である。

テレビアニメを用いたものとしては、奥村1989の「サザエさん」による日本語の語彙・文型の習得を主たる目的とした授業の実践報告がある。授業の進め方は、最初のビデオ視聴でストーリーの概要を理解させるためのQ & Aを行い、二度目の視聴はメモを取らせながら新語と重要語の確認を行う。そのあと文型の口頭練習及び作文練習を行い、最後に三度目の視聴を通して、まとめと確認を行うというものである。

テレビドラマを用いた授業の実践報告としては、有賀1990がある。有賀1990では、中級の聴解クラスでNHKの銀河テレビ小説「金婚式」(1回20分×3回=1時間)を用いた授業の報告がなされている。1時間の長さのビデオを9時間(3時間×3回)の授業で使用し、授業の進め方は、ビデオを見る前に、ビデオに出てくる表現のディクテーションを行い、その表現についての確認を十分に行った上で、ビデオを場面ごとに区切って見せる。学習者にディスカッションや発表をさせながら、語彙、ストーリー、登場人物の関係、登場人物の心理などの内容の確認を行うという方法が取られている。間に、次に続くストーリーの予測をさせたり、登場人物になったつもりで自己紹介の作文を書かせたりしている。また、一部分についてビデオを見せる前にシナリオを配布し、学生にロールプレイをさせ、内容を十分理解させた上でビデオを見せることにより学習者に役者の表情、抑揚のつけ方などに注目させるといった工夫がなされている。ドラマをすべて見終わった後に、新聞のテレビ欄に掲載された「金婚式」の投書を読

ませ、実際に新聞に投書するつもりで学生にドラマについての感想を書かせるという授業内容である。有賀の映像教材使用の大きな目的は、映像教材を用いての四技能の総合的な能力開発の可能性を追及することである。

以上の先行の実践報告に共通する点は、いずれも映像を用いる目的が日本語学習にあることである。市川1991のテレビ番組を通じての「日本事情の知識獲得」という点については、筆者らの目的の一つと合致するものであるが、市川1991では授業の主たる目的は「聴解」指導にあり、「日本事情の知識獲得」はそれに付随するものとして取り上げられている。筆者らの実践は、「日本事情の知識獲得」のほうが主たる目的であり、「聴解」指導のほうが付随的な要素である点で異なる。しかしながら、上記の先行報告で述べられているキーワードの提示、単語表による語の確認、登場人物の関係、心理などの内容確認などの手法は本実践でも取り入れており、目的とするところは異なるが、映像を教材として使用する場合の参考点が多々ある。

また以上の実践報告で扱われているテレビ番組は、報道番組、「サザエさん」などのように時間的に短く簡潔し、内容及びパターン化の把握が比較的容易なものが中心である。有賀1990ではドラマを見せられているが、「教育目的をもって作られた専用の映像素材が用意されることが望まれるが、中級用の専用映像教材が少ないために、あえてテレビドラマを使用する」と述べられている。筆者らは、専用の映像素材からは得られない、日本語の授業で用いる際にはマイナス要素となる雑多な内容が含まれる一般の映像メディアを読み取る力を養成したいと考えているので、この点も大きく異なる。

最後に、日本語学習ではなく「現代日本事情」の学習に主眼を置いた実践報告を二つ紹介したい。小西・島2001のテレビCMを用いた異文化理解教育のための授業と、門倉2001bのメディア・リテラシーを主題とした日本事情の授業である。小西・島2001では、中上級レベルの留学生と日本人学生の合同授業の中で、日本のCMを用いた授業報告がなされている。留学生の「現代日本社会や日本人の価値観への理解」「比較によって母国理解を深める」「無意識の意識化を図る」ということを授業の目的とし、授業内容は、教師が選定したCMを5本視聴しタスクシートを利用しながら、ディスカッションを通して留学生並びに日本人学生の異文化理解を深めるというものである。門倉2001では、「メディア・リテラシー」を主題とした教養教育「日本事情」クラスでの報告がなされている。そのクラスでは、テレビ、新聞、写真など様々なメディアを取り上げている。テレビのCMについては留学生がおもしろいと思うテレビCMを学生自身に録画させ、メディア・リテラシーの観点からCMの映像的特徴などについて考えさせる。さらに学生自らCMを制作してみることで、既成のCMを見つめ直すという授業が行われている。

小西・島2001の目的とするところは筆者らの目的とするところと重なるが、授業で取り上げる素材及びテーマは異なる。小西・島2001は素材をCMに限り、テーマは「男性観」「価値観の多様性」「商品の新しい売り方」「若者像」である。一方筆者らは、テレビドラマや映画、アニメなど幅広い素材を対象としながらも、そのテーマは「家族」「環境」「医療」「教育」など人類共通の課題となっている種々の地球問題という一つの枠組をとっている。門倉2001bとは、前節で述べた通りメディア・リテラシー教育と、メディア利用教育という点で異なる。

## 4 「映像読解」授業の実践例

### 4.1 授業の概要

本節では、筆者らの「映像読解」授業について、具体的な内容を述べる。

富山大学留学生センターでは、全学の留学生を対象とした日本語課外補講が開講されているが、この中に「日本文化」という科目が設けられている。本学の留学生は、「日本事情」や「日本文化体験」などの科目、あるいは地域の行事などに参加することによって、何らかの形で華道、茶道、書道といった

いわゆる日本伝統文化に触れる機会が与えられている。しかし、現代日本の文化については、日本語能力の養成の方が重視され、あまり取り上げられてこなかった。そこで、現代の日本文化の様々なテーマを、映像を中心としたメディアを通して、他の文化背景を持つ学習者とともに考えてみるという授業を行うことにした。この授業の目的は、大きく二つに分けられる。一つは「現代日本文化」を読み解くための活動を行うこと、二つ目はそのためのツールとしての映像メディアを使いこなせるように、「映像読解」のスキルを養成することである。

授業の対象者は、日系ブラジル人学生、中国人学生らで、日本語能力は中級から中級の上程度である。授業は、週に1回90分で、14回行われた。

扱ったテーマは表1の通りである。これらのテーマは、現代日本を考えるトピックでもあり、各学習者の母文化を捉え直す材料となり、さらに人類共通の問題を考えることにもなり得るものである。

授業では、映像メディアだけでなく、関連のある文献や、新聞、雑誌、自治体からの広報、流行歌など、他のメディアも使ってテーマを掘り下げた。しかし、文献や新聞記事などについては、他の日本語の授業でも多用されており、教材として新鮮味があるとは言えない。一方学生にとって特にストーリー性のあるTVドラマや映画、アニメ等の映像メディアは強い興味や、読み解けないというフラストレーションがあるにもかかわらず、授業ではあまり扱われていないこともあり、強い動機を持って授業に臨んできた。実践を積み研究につなげる必要性を感じたこともあり、次第に映像メディアの中のストーリー性のあるTVドラマ・映画・アニメに重点を置くことにした。

使用した映像メディアの選択理由についても触れておく。まずテーマ性があり、制作者側に社会の断面を照射し、切り取ろうとする意図が見える内容であること、新しく話題性があり、これを視聴した経験が日本人の友人への問題提起や話題共有になり、学生の「現代日本事情」学習への更なる動機付けになるものであることが挙げられる。この周囲の日本人学生との話題共有ができるということは、大袈裟を承知で言えば、学生にとってまさしくこの「今」の日本社会に「存在」したという実感と充足感を与えるものとも言え、「現代日本事情」で取り上げる価値は高いと考える。さらにこれに加えて、4.2で詳しく述べるが、扱った映像のストーリー全部を見せることを目指したため、あまり長すぎるものは避け、数回の授業で見終われるぐらいの時間であることも、条件の一つとなった。

表1 扱ったテーマと取り上げた映像メディア

	扱った テーマ	取り上げた映像メディア
1	家族	<p>テレビアニメ</p> <p>『サザエさん』 (フジテレビ, 毎週日曜日午後6時半より放映。1話7分程度。)</p> <p>『ちびまる子ちゃん』 (フジテレビ, 毎週日曜日午後6時より放映。1話12分程度。)</p> <p>テレビドラマ</p> <p>『ダブルキッチン』 (TBS, 初回放送は1995年。tbs channel (CS放送)で、2002年秋に再放送。山口智子主演。授業では、第1話を使用。45分程度。)</p>
2	職業観	<p>(流行歌)</p> <p>『およげ!たいやきくん』(高田ひろお作詞, 佐瀬寿一作曲・編曲, 子門真人1974年。フジパシフィック音楽出版。)</p>

3	ジェンダー	*このテーマでは、映像メディア以外のものを使用。
4	環境	アニメ映画 『平成狸合戦ぽんぽこ』 (宮崎駿企画, 高畑勲監督・脚本。1994年。スタジオジブリ。119分。)
5	医療	映画 『ナースコール』 (長崎俊一監督, 信本敬子脚本。薬師丸ひろ子主演。1993年。110分。) (DVDの) 発売・販売元 バンダイビジュアル株式会社。)
6	教育	テレビドラマ 『3年B組金八先生』 (TBS, TV放送は1995年。武田鉄也主演。授業ではビデオ化されたもの(第5シリーズ・全8回)の第1回を使用。95分程度。)

## 4.2 実際の授業の進め方

本節では、実際の授業の進め方について述べる。なお、前節にも触れたように、この授業では映像メディアを使わなかったテーマもあるが、ここでは、映像メディアを使った「映像読解」授業について論じていくために、映像メディアを使った授業についてのみ述べていくことにする。

授業の進め方は、次のようなプロセスをたどる。まず、(1) 扱うテーマに関する背景知識を活性化するための活動を行い、それから、(2) 取り上げる映像メディアについての説明をした上で、(3) 実際にビデオで見る。(4) 最後に、内容のディスカッションを行う。それぞれの詳細について、以下に述べる。

なお、授業ではワークシートを用いながら進める。ワークシートは、この授業を知識注入型のものにしたくないという基本的な方針に沿って、リソースとしての情報は載せるが、学習者が自ら考えたり、教室で話したりしながら、埋めていくという形をとる。

### 1) 扱うテーマに関する背景知識を活性化するための活動

ここでは、扱うテーマに関する背景知識を活性化するために、まず、必ず知っておく必要のあるキーワードを取り上げてから、関連の活動を行う。図1のようなワークシートによって行う。

キーワードを提示することの目的は、映像メディアを見て様々な活動を行うために、最低限必要な語彙を習得させることにある。しかし、この授業は、日本語の語彙や文型の習得が主目的ではないので、文型練習を繰り返し行うなどはしない。たとえば、「家族」のテーマでは、「両親、長男／長女、一人っ子、祖父母、孫、嫁、舅、姑」などのような語が、また「職業観」のテーマでは、「サラリーマン、職場、上司、部下、出世」などのような語が、キーワードとして提示されている。

次に背景知識活性化のための活動についてであるが、学習者はすでに母語で、それぞれのテーマについての知識はある程度持っていると考えられる。これらを活性化させておくことで、学習者は理解を深められるだけでなく、積極的にテーマに関与していこうとする動機にもなる。具体的には、「環境」のテーマでは、資源リサイクルのための様々なマークに気づき(図1参照)、その意味を確認する活動や、自国のごみ事情について話す活動などを行わせる。また、「教育」のテーマでは、理想の教師像や人気の教師像などについて話し合わせたりもする。

『日本文化』(2006年産経学園・大塚3編)  
—メディアが映し出す現代日本社会—

**環境**

担当：深澤のぞみ  
nozomi@lav.toyama-u.ac.jp

おぼえておきたいキーワード

環境について話すのに必要なキーワードです。  
それぞれ、読み方や意味を調べておきましょう。

	ことば	読み方	
1	環境		
2	地球		
9	エコ		
4	資源		
5	エネルギー		
6	ごみ		

図1 ワークシート  
背景知識活性化のための  
キーワード部分とイントロダクション

1. イントロダクション

1-1 最近、よく見かけるようになったマークです。何のマークでしょうか。



1-2 「地球にやさしい」とか「環境にやさしい」という言葉を、広告やホームページなどでよく使われるようになりました。次の写真は、何の広告で、どんな意味か、考えてみましょう。

前述した背景知識を活性化する活動を経て、映像メディアを実際に学習者に見せることになるが、その前に、そのメディアに関する説明を行う。具体的には、取り上げる映画やテレビドラマ、アニメなど、それぞれの制作当時の社会現象や、また、メディア全体の中ではどのような位置づけなのかなどについて触れる。これは、2節でも述べたように、メディア・リテラシーの視点からも押さえておくべき事項の一つである。たとえば、アニメや漫画に対して、日本語学習の動機になっているようなケースがある一方で、あくまでも荒唐無稽な子供向けのものにすぎず、そこには日本事情的な観点から見べきものはない、といったようにアプローチすることさえ拒むようなケースもある。そういったことは、日本のメディアの全体像や各メディアの位置づけを説明することで、回避できることである。

また取り上げるメディア自体の説明や、それと関連する事柄について活動を行う。たとえば、テーマ「環境」で扱った『平成狸合戦ぽんぽこ』では、「狸」というもののイメージなどについて、テーマ「医療」で扱った『ナースコール』では、「看護婦」のイメージについて、事前に話し合い、各文化による違いなどを確認する(図2参照)。



### 3. ビデオに見る日本の環境問題

ビデオ 『平成狸合戦ぽんぽこ』を見る

3-1 見る前に

- ・ 狸のイメージは？  
日本で  
あなたの国で
- ・ 狸の特技と言われていることは？
- ・ 狸以外の、他の小動物のイメージは？



図2 ワークシート

#### 映像メディアを見る前のタスク

## 2) 実際に映像メディアを見せる

ここまで述べたようなプロセスを経て、実際に、映像メディアを見せることになる。この授業の大きな目的の一つに、「映像読解」のスキルを養成するということがあるが、この観点から心がけたのは、基本的に、「流して見せる」とことと「ストーリー全部を見せる」ということである。

せりふ一言ごとに、止めて説明するようなことはしない。ただし、どうしても全体の理解に欠かせないような場面では、止めて解説をすることもある。<sup>(5)</sup> 中級以上の学習者になると、いわゆる聴解教材などのような短い時間で一定の情報が述べられているものや、文型や表現導入のためのビデオ教材等は、ほとんど問題なく聞き取れ理解できることが多い。それにもかかわらず、実際のテレビ番組等については、それほど難易度が高くなく思えるものでも、驚くほど重要な情報が取れていないというようなことがある。この理由としては、教材用に作られたものは、一見自然に見えても、語彙表現が限定されていることに加えて、情報量が制限されていることが考えられる。現実の映像メディアは情報量が多く、提示のされ方も、日本語母語者以外の視聴者のために特に考慮されているわけではない、ということが挙げられる。

筆者らは、現実の映像には、大きい意味での「構造スキーマ」と呼べるものがあるのではないかと考えている。映像内に情報がぎっしり詰まっているのではなく、導入部分から内容に入り、しかし内容の部分にも濃淡があり、最後に結末へと向かうといったような、映像の構成の仕方には、ある程度ユニバーサルなものがあるように思える。たとえば「内容の濃淡」について言えば、それぞれ自分の母語で映像を見る場合に、私たちはこのようなスキーマを利用して、テレビなど「流れている映像」の前にずっと座っているのではなく、時々水を飲み立って、また戻って来るなどの行動を繰り返しながら、ほぼ正確に必要な情報を取っているのである。このようなスキルを養成できないために、学習者が教材の映像は理解できても、日本社会で現実に共有されている「生」の映像は理解できないという現象が起こるのではないだろうか。

この授業ではこのような考えから、書物を読む際に「読み飛ばし」をするように、映像を見る際に「見とばし」を行った。<sup>(6)</sup> 教師がビデオの映像を作為的に戻したり、進めたりという手を加えることができるだけ控え、映像を流したままで、さほど重要でない場面では、前の部分の補足説明をしたり、学

習者に質問したりといったことを行ったのである。つまり日常生活の居間での現実の視聴状況を再現するために、頻繁に見直すなど、自然な視聴進行を止めるようなことは極力避けたということである。

通常、授業で映像を使う場合には、準備した映像をあらかじめ編集やカットすることが多いが、この授業では、そのようなことをせずに、上述のように基本的にはストーリー全部を見せるようにした。

### 3) 内容のディスカッション

映像を見終わったところで、教室にいる全員で、内容のまとめをしながら、様々な点からディスカッションを行う。

以上のようなプロセスで、映像メディアを使って「現代日本文化」を読み解くための活動を行うこと、読み解くためのツールとしての映像メディアを使いこなせるように「映像読解」のスキルを養成することを目指した授業を試みた。

今回の授業では、試みが新しく試行錯誤しながら進めたため、学習者から授業評価を受けるところまでには至らなかった。しかし授業に出席した学習者は、従来の新聞や雑誌などの印刷メディアを主に使用した授業より、さらに興味を持って取り組んでくれた印象を受けた。またそこで、行われたディスカッションでも表層的な善悪論、母文化との差異を強調する比較に終ることはなく、「どのような社会的要請がこのような番組を制作したのか」「この番組は、現実のどの部分を映し得たのか」「この番組が反映している社会事象は何か、それは日本という社会に特有なものか」という議論が、見られた。

## 5 今後の展望

今後の課題としては、まず映像の分析・解明が挙げられる。これはメディア・リテラシーの分野で主に言われている映像の文法<sup>(7)</sup>という視点と、4.2の3)で触れた構造スキーマの視点からの分析・解明が考えられる。映像文法は、カメラワーク、モンタージュ技法、パンなどの映像技法と「画面の意味」との関係进行分析することである。また本実践で扱った映像メディアの内のTVドラマ、映画、アニメなどを見ていると、そこには「映像表現の現代日本の特徴」と呼べるものがあるのでないかとの考えた。たとえば「感情表現のデフォルメの過剰さ」「性表現のオープンさ(激しさ)」などである。この現代日本の特徴は、映像メディア先進国というくくり方も可能かもしれない。

画面が与える多量の複雑な情報の中の、何を重要情報として認識すべきかが映像読解の基本になり得るが、それを指導する場合、それは教師の経験則に任されているのが現状である。これを映像文法、構造スキーマの視点から分析・解明するという作業とその教育現場への応用は、まだほとんどされていないと言っていいたいだろう。

課題として次に挙げられるのは、映像メディアの選定基準の難しさであろう。映像メディアの中でも同時代的に進行しているTV番組、映画などを使用する場合、「評価が定まっていない」「視聴率などの商業的影響を強く受けている」など、教材として適格かの問題は常につきまとう。しかし、本稿でもすでに述べた通り、これら同時代の映像メディアは留学生が日々さらされ、そこから無意識にせよ「現代日本のイメージ」を体得しているのである。また日本社会に限らず、「その社会の現代事情」を語るに必要十分な情報を提供する完全な素材など存在し得ないという立場もある。これは、メディア・リテラシーの立場に近いと考える。筆者らは「現代日本事情」を形作る社会的知識・所産が固定的に在るという立場はとっていない。そこから必然的に「学生が主体的に自・他文化を読み解く力が必要」という教育目的が導かれる。本実践では、教師が十分な誠意を持って選んだ映像メディアを、それを「正確な日本事情がここに投影されている」という提示は毛頭せず、「クラス全体で日本文化のイメージを共に探求し、共に練り上げていく」という作業をした。これは本実践の教育目的に照らして、十分ではないが

妥当な教育実践だったと考える。ここには、メディアのあり方から問うメディア・リテラシーと「現代日本事情」教育への乗り合わせがある。しかし『現代日本事情』を読み解くためのツールとしての映像メディア選定』についての議論がさらに必要なは言うまでもない。それには「日本事情」を担当する教師自身のメディア・リテラシー教育という視点も必要なのかもしれない。

最後に、筆者らは現代日本文化ひいては学習者の自文化を読み解く力の養成の一つのツールとして、映像メディア中でも特にストーリー性のあるTVドラマ、映画、アニメが有用ではないかと考えたわけだが、それがどの点でどのように有用なのかは、今後さらに実践を積み重ねて実証していかなければならない。たとえば、筆者らの映像メディア（TVドラマ、映画、アニメ）採用のきっかけの一つに、学習者の授業参加への強い動機づけになったことがあるが、「現代日本事情」と学習者の動機づけという面からの調査・論考は、必要なはずだがほとんどなされていないと思う。

映像メディアの読解力とそれを支えるもの、さらにその「現代日本事情」教育の有効性の分析・解明は様々な視点から始め、進められるべきだと考える。

### 注

- (1) 佐々木2002は、多くの「日本事情」教育の実践報告、教授者へのアンケートなどを元に「日本語・日本事情で重視される文化概念図」を作成している。それは大きく「所産・知識としての文化」「個としての文化」「他者との相互作用に介在する文化」の3つに分けられ、どの文化が重視されるかは、それぞれの授業実践、教材、論考で異なる、としている。
- (2) 「テレビやマンガ、アニメは一部の教師がそれぞれの工夫でクラスに取り入れているだけで、それらの教材としての可能性は十分に探求されて来ていないように思える。」(p.167) (門倉2002)
- (3) 市川1991では、語彙表については最初には与えず、個人での聴解練習の段階で渡すことを原則として、語彙表に頼らずにビデオの理解に専念させている。
- (4) 市川1991は、「マス・メディアの中でもテレビは逸早く時事問題を取り上げられる媒体であり、最新の情報の獲得源であるといつてよい。ニュースの報道する情報自体ばかりでなく、今日の日本社会の中で何が特に重視されているか、コメントされたりしているか、番組の性質や話題に対するスタンスによって報道にどのような差が出てくるか知ることによって、日本事情の理解が深められると考えている」(p.134)と述べている。
- (5) 『平成狸合戦ぽんぽこ』で、敵である人間のお葬式に、人間に化けた狸たちが参列する場面がある。ここで狸たちは、嬉しさを隠しきれず皆笑顔であるため、部屋に張りめぐらされた白黒の幕の意味がわからなければ、お葬式の場面だということが理解できない。実際の授業の際も、出席していた留学生は、だれ一人、白黒の幕がお葬式を意味することを知らなかった。
- (6) 映像教材を用いた授業実践の中では、映像を消して音声だけに集中させるなど「見とぼし」の対極の活動も多く行われている。これは読解で言えば精読や逐語理解に当たる作業で学生のニーズ（通訳、その他の専門職など）によっては、特に必要になることだと考える。
- (7) 門倉2002は、留学生に対して行ったメディア・リテラシー授業のシラバスに「映像文法の基礎」を置き、「絵カードによってカメラワークやモンタージュ技法の基本を知る」作業を行っている。

### 参考文献

- (1) 有賀千佳子(1990)「中級における映像教材活用の可能性ードラマ素材を用いた授業の一例ー」『日本語教育』71号 pp.210-224 (日本語教育学会)
- (2) 市川智子(1991)「上級聴解クラスにおけるテレビ報道番組ビデオの利用ー米国国務省日本語研修所の場合ー」『日本語教育』73号 pp.127-139 (日本語教育学会)
- (3) 遠藤裕子(1988)「大学生のための聴解ーニュース番組の特集を利用してー」『日本語教育』64号 pp.109-121 (日本語教育学会)
- (4) 奥村訓代(1989)「日本語教育におけるTVプログラムの利用」『日本語教育』68号 pp.228-235 (日本語教育学会)
- (5) 門倉正美(2002a)「メディア・リテラシーの世界」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』pp.154-171 (凡人社)
- (6) 門倉正美(2002b)「メディアを思考(志向・試行)するー日本事情としてのメディア・リテラシーー」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』第3号 pp.82-92 (くろしお出版)

- (7) 川上郁雄(1999)『『日本事情』教育における文化の問題』『21世紀の日本事情』創刊号pp.16-26 (くろしお出版)
- (8) 倉地暁美(1996)「異文化間教育学と日本語・日本事情の接点を求めて」『異文化間教育』10月pp.75-88 (異文化間教育学会)
- (9) 国立国語研究所(1995)『日本語教育指導参考書21 視聴覚教育の基礎』(大蔵省印刷局)
- (10) 小西光子・島弘子(2001)「テレビCMを使った異文化授業の試み」日本語教育学会平成13年度第7回研究集会北陸地区-金沢- ハンドアウト
- (11) 佐々木倫子(1997)『『日本事情』と日本語教育-国内・国外の連携』『日本語学』5月臨時増刊号pp.110-117 (明治書院)
- (12) 佐々木倫子(2002)「日本語教育で重視される文化概念」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』pp.218-234 (凡人社)
- (13) 菅谷明子(2000)『メディア・リテラシー』岩波新書680 (岩波書店)
- (14) 長谷川恒雄(1999)「日本事情-その歴史的展開-」『21世紀の日本事情』創刊号pp.4-15 (くろしお出版)
- (15) 三門準(1994)「テレビ番組『視点・論点』を利用した専門日本語教育の試み」『日本語教育』82号 pp.228-235 (日本語教育学会)
- (16) J.V.ネウストプニー(1995)『新しい日本語教育のために』(大修館書店)
- (17) 山田みな子 (1990)「ハイテクTV番組を使って-中国技術研修生のためのビデオ聴解授業」『日本語教育』70号 pp.158-170 (日本語教育学会)